

人魚と天狗と人狼と猫
又と耳長とえーとド
ワーフ？

仲間はずれのドワーフ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

よくあるゲーム世界にゲームキャラの力を持つて転生モノです。
でも現代に行きます。

目

次

はぐれ旅立つ

友達できたり

バレました

極上のビー玉

掲示板回1

魔界調査隊！

1

32 25 21 15 5 1

はぐれ旅立つ

【条件が満たされました】

【アイテムボックスが開放されました】

【ショットプが開放されました】

【ステータスが開放されました】

【アバターが開放されました】

【言語情報がインストールされました】

【転生セットが配布されます】

崖に隠れるようにたつた小さな掘っ立て小屋の前で、魚を焼いて食べていると、そんな声が聞こえた。

まじかよ。

「どうしたの、兄様？」

「にーさま？」

「おい、ミオ……」

「ああ、オオタカ」

弟のウロと妹のカナが首をかしげるが、さつきと食べるよう促す。

気がつけば俺は、かつてプレイしていたゲームの世界でツインテールマーメイドとして転生していた。

ツインテールマーメイドとは、両足がそれぞれ魚の足になつたようなもので、顔は耳のあたりに美しいヒレがあり、髪は青系統が多く、肌も青め。

人間に変わることも出来る……というか、人族以外の種族が使える魔法があり、それが人間になる魔法である。

他には、他の種族を一時的に同じ種族にするのは全種族使える。

確か、ゲーム設定では、亜人狩りを憂えた神の対策、ということだつたはずだ。

ゲームのどの時期かはわからない。テリトリリーの関係で、中々気軽に足を伸ばせないので。でも、そろそろ俺もオオタカも15になる。だいぶ力もついたし、蓄えも溜まつてきた。そろそろ動いても良いかもしね。

変わり者として遠巻きに見られ、父に邪険にされ、母に気味悪がられて生きてきた。

5歳から群れからはぐれて暮らすようになり、同じような境遇の翼人のオオタカとひつそりと暮らしていく、たまに弟のウロと妹のカナを迎えていたのだが。

早速アイテムボックスやショップ、転生セットを調べ、オオタカは笑つた。

「運が向いてきたぜ」

指差した先には、地球へのゲート装置があつた。

俺達は、早速掘つ立て小屋の中にゲートを設置した。
繋げた先は、人気のない岩場の影。

「ウロ。カナ。お前達は帰れ。俺達はこれから忙しい」

「いやー!!!」

「僕も行く!!!」

言うことを聞く気配がなかつたので、仕方なく連れて行くことにする。

人間に変身して、もしもの時のために用意しておいた真珠を握り、ウロとミオの手を握つて移動した。

「懐かしの日本だ……！」

「ああ、凄いな、ミオ……！」

感動する。

「けほつ けほつ ねーこ、汚い」

「そう思うよ。でも、俺達の故郷はここなんだ」

そうして、俺達は自由へと猛ダッショウした。

具体的には、身元不明でも雇つて貰える場所を探し、海岸にこつそり家を作り、オオタカとともに住み着いたのだつた。

4 はぐれ旅立つ

友達できた

半月後。

休日に海を泳いでいたら、歌声が聞こえたので近づく。

なんと、ぷかりと浮かんだ男達が歌つてているではないか。

一応、救命胴衣は着ているようだ。

「大丈夫？」

「うお!? お前が大丈夫か！ 海中でコスプレ!? 撮影!??」

「うわ、見てください人魚ですよ！ 本物！」

お前ら余裕だな。それに、俺のことを先に心配する所が気に入つた。

「遠いよ。そうだね。俺のこと内緒にして、服を買ってくれるなら、陸まで連れて行つてあげようか？」

「お願いします！」

俺は近づいていつて、キスをする。男相手は嫌だが、仕方ない。

もとより、この魔法は愛の魔法なのだ。

魔法は上手くかかり、男達はツインテールマーメイドになつた。俺は救命胴衣を脱が

せる。
!??」

ぶわっと空気が漏れる。そのまま水中で呼吸が出来ることに驚く。

「君は人魚!?」

「ツインテールマーメイドって言うんだ。さあ、急ごう。俺の魔法は一日しか持たない」

そして、先行して陸へ向かう。

男は着いてきた。

ちよつと加減しながら泳ぎ、陸に着く。

オオタカがバスタオルを持つて待つてくれていた。

「お疲れ、ミオ」

オオタカに引き上げてもらい、尻尾を拭いて人になる。

ゴミ捨て場から失敬した服を着た。

そして、手を伸ばした。

「ほら、おいで」

「あ、貴方も人魚なのですか?」

「俺は翼人。天狗と言ったほうがわかるかな?」

オオタカが翼を出す。

「ふええ」

「はわわ」

「いや、命の恩人なんですから、そこは新品を買いますよ」

「じゃあ、早速近くのリサイクルショッブ行こうぜ！」

「急かす才オタカ。」

「ひとまず、無事だつたことを告げないと」

「服が先！　俺らのこと内緒にできないだろ」

「はあ、怒られるけど仕方ないな。生きていてこそだし」

「そーそー。それでいいんだよ♪」

俺達はリサイクルショッブで服を何着か買ってもらい、ついでに携帯を買ってもらい、お小遣いとして5000円貰った。すげー嬉しい。助け貸にしても大盤振る舞いである。ゲーム世界の服だと、違和感がある気がして困つてたんだ。

「お前らの服装の奴が溺れてるの見たら、また助けてやるよー！」

「俺達の服装じやなくともそこは助けてあげて下さい」

そして、俺達は通話アプリでやり取りするようになり、仲良くなつていつた。半月後。待ちに待つた給料日が来たので、ゲートを開いた。

次の日とその次の日には休みを合わせて佐藤と山口とショッピングやキャンプをする予定だ。2人はもちろん、助けた自衛官である。

それぞれの家族に贈り物をするためだ。

ツインテールマーメイドも翼人も光り物が好きなので、ビー玉を献上することにした。

ゲートを開くと、ウロとカナが待っていた。オオタカの弟のオオワシまでいて、睨み合っている。

「オオワシ、どうしたんだ」

「ウロ。カナ。ずっと待つてたのか?」

「兄上!」

「兄様!」

「にーさま!」

「どうもこうもない。餌なんかと愛し合うなんざイカれている」

吐き捨てるオオワシ。

「は? オオタカは男だし、単なる友達なんだが? 引つかかるのそこかよ」

「そうだぞ。ミオは男だぞ。ピチピチの可愛い人魚の女の子だつたら考えるが」

「じゃあなんでこいつと同居する?」

「友人と同居しちゃ悪いかよ。それより、出稼ぎしてきたからやるよ」

俺とオオタカは、それぞれビー玉を渡した。陽の光を存分に反射し、ギラリと光る。そういうビー玉を選んできた。

「す、凄い……」

「脆くて安物だが、キラキラしているだろ？ やるよ」「う、うん」

「兄上！ 一族を売ったのか!!」

「は？ 売るわけねーだろ」

「こんな宝玉、それぐらいしか手に入れる方法ないだろ！」

「ばーか、こんなの簡単に作れるんだよ。一食分より安いわ」

「??」

「あーあ、せっかく今日は給料日だからってお土産買つてきたのにな。疑われるんじやな。せっかく人間の街に買い物に連れて行つてやつてもいいかなつて思つてたのになあ

「オオワシ様！ お兄様！」

「おーわし様！ にーさま！」

ウロとカナは、べちゃつと地べたに潰れる。そういう所好きよ、お兄様。

「苦しゅうない苦しゅうない。そうだな、3000円分何か買ってやるよ」

「俺もオオワシの分、2人にあげちゃおつかな」

「オオワシ様！ お兄様！」

「おーわし様！ にーさま！」

オオワシはぐつと黙つた。

「お、俺も……連れてつて

「どうしようかなー♪」

「連れてつてくれ、兄上！」

ということで、三人を連れて行くことになつた。

人間に化けさせて、Tシャツとフリーサイズのズボンを3人に着せる。

そして、ゲートをくぐつた。

「な、なんだ、ここは!?」

「ようこそ、地球。またの名を人間界へ」

「人間界……」

俺達はキヨロキヨロする三人を連れて、街中へ移動する。

「オオタカ！ ミオ！」 「オオタカさん、ミオさん！」

「よー」

「子供?」

「弟と妹。こつちがオオタカの弟のオオワシ。で、俺の弟のウロと妹のカナ」

「よーし、ウロくんとカナちゃんの為に散財しちやうぞ!」

「やめとけ」

「今日は俺達の給料日のお祝いだからさ。いっぱい奢つてもらつたし」

ということで、お買い物である。

言葉がわからないウロとカナとオオワシの為に通訳してやりつつ、子供のおもちゃ売り場に行つた。

ウロは女の子向けのビーズでアクセサリーを作るおもちゃに釘付けである。

ちょっと予算オーバーだがオオタカは兄の威厳を見せて買ってあげていた。

ウロとカナも色々と目移りしていたが、結局冬服にしたようだ。

「次も来たいもん!」

「つぎもおでかけ♪」

なるほど、Tシャツではそろそろきつい季節だしな。我が弟妹は賢い。

「お、俺……」

「はいはい、オオワシにも服買つてやるよ。安物な?」

その後は、食事をして、ゲーセンで少し遊んだ。

ホテルの人に事情を話し、人数を増やしてもらう。

元から広めのお風呂付きの大部屋なので助かつた。

ウロとカナはお風呂で一息つき、オオワシも羽を出して伸びをする。

朝は山に入り、俺達の用意した服に着替えてオオタカがオオワシ以外にキスをした。すると、ばさり、と翼が生えた。全員翼人になつたのである。

『兄上、その術は、愛の秘術……！ 尻軽！ 兄上の尻軽！』

『あー、便利だから、ちよつとぐらい、な？』

「なんて言つているんだ？」

「これ、本来は異種族を愛してしまつた時に相手にかける術なんだ。そんなの古いつて思うけどな。魔界に住む者なら大抵使える、愛の奇跡だ。俺とオオタカは愛がなくとも仕えるけど」

「なるほど、同種族になつて子作りをすると」

「いや。子作りはしない。その場合は婚姻の儀式によつて永続的に種族を変えることになる。色々必要になるし、俺達にとつても愛の儀式だから、そこまではしないぞ。まあ、天狗の恋人か人魚の恋人が出来たら相談してくれ。ただし、その時は魔界に来る覚悟もしておけよ」

「おお……魔界つてあつたんですね」

「可愛い天狗ちゃん紹介してくれ」

「大多数の天狗ちゃんは人間嫌いなんだ。すまん。つていうか、お前らちゃんと飛べる？」

ウロとカナは一生懸命飛ぼうとして羽を動かそうとしているが、上手くいかないようだ。

「航空自衛隊隊員の意地を見せてやる!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおお!!」

翼をバサバサと動かし、風が周囲を吹く。おお。飛べそう。飛んだ!

「飛べる! つてことで、魔界語? 天狗語も教えてくれ。覚悟はしてる!」

「そうだなあ。人間視点でめちゃ美人で鳥人視点だとそうでもない子とか紹介しようか?

「頼む!」

「もつと考えましょよ。魔界についてもつと知つてからにしたいですね」

「部外者に教えるわけ無いだろ?」

「そうですか。では、私も腹をくくります。私にも紹介して下さい」

それから、休日ごとに俺達は会つて遊び、それに加わる翼人や人魚も増えていった。

ぶつちやけビー玉と美味しいご飯に釣られたのだ。

こつちの海はあんまり強い外敵もいないしな。人間怖いのは共通しているし。

バレました

俺はニヤニヤと笑み崩れた。

色白で、真っ白な綿毛のようなふわつふわの女の子である。空の青の瞳がまた可愛い。

「かーつ 羨ましい！ 羨ましいぞ、佐藤 翼！」

「だろだろ？ 可愛いだろ？ 天狗の嫁さんなんだ」

「天狗？」

「そういう言い伝えなんだ。しきたりで、この子と結婚するにはこの子の村で狩りとかして暮らさないといけなくてさ。厳選したビー玉を捧げて、天狗の祈祷師に祈つてもらつて、天狗になるんだ」

「なんだよ、それ。日本で狩りなんてする場所あるのか？」

「それがあるんだよ。忍者の隠れ里みたいなので、天狗の隠れ里的な。だからまあ。行方不明になつても、心配しないでくれ」

「おいおい、不穏だな」

もちろん、これぐらいは言うことを許可されている。
バレた時に、問答無用として化け物として処理されないように予め言っておけだそ
だ。

ミオもオオタカも優しい。嫁さんのほうが優しいがな!!

外国人なんて、と言っていた父母はころつと参つてしまつた。

もはや天狗だろうがどうぞ貰つていつてくださいである。

可愛いは正義である。この子と空のためなら除隊もなんのその。
写真を片付けて、任務へと向かう。

表向き、操作ミスによる墜落になつてゐるが、実はあれは撃ち落とされたのだ。

日本は平和なのではない。平和に見せかけているだけなのだ。

日に日に情勢が厳しくなつてゐる中、油断はできないと氣を引き締めた。

戦闘機にのつて、緊急発進。

飛んでいると、戦闘機がエラーを吐き出す。

「今度は機体の故障かよ……。しようがねえな」

「どうする!? 脱出装置が……!」

「こーする」

ガシャンと窓を割つて脱出。上着を脱いで、翼を広げた。

更に窓を割つて富田を救出。無理やり上着を脱がし、唇を奪つた。

「俺にそんな趣味は……?? 翼……!? 飛んで……!」

「ほらほら、頑張つてはばたけ。俺も飛ぶのまだ苦手なんだよ。お前一人抱えてなんて
とつても無理だ」

「お、おお……！ 飛べた！」

「上手いじやねーか」

そして。俺は人魚のSOSを歌つた。

SOSまで歌なんて優雅な種族である。

ひょこんと少年の人魚が顔を出す。

「コスプレ？ いや、本当に人魚！」

『船があつちにあるよ。案内する？』

『ありがとう。ぜひ頼む』

「なあ！ 人魚！ 人魚だつて！」

「はいはい、俺は天狗ですよつと。お、ラツキー。湾岸警備隊の船じやん」

船の上では、人が大騒ぎである。俺を、少年を指差している。
少年を助けないと、とか、なんだか妙だ、なんて言つてゐる。
少年に手を振り、なんとか（自称）優雅に船に降り立つた。

その頃には少年の尾びれが透けて見える位置となり、皆大騒ぎだつた。翼を戻すと、富田がガクブルしながら、立ち上がつた。富田からも翼は消えた。こつちは時間切れ。ギリギリだつたな。

「航空自衛隊のものです。連絡をお願いします」
『さんきゅーな！』

ジヤーキーを少年に投げて、そして振り向く。

「さ、さつきのは航空自衛隊の装備ですか？」

「そうです！　さつきの少年も国家機密ですので、内密にお願いします！」

富田は震えながらもはつきりきっぱり言つた。

「は、はあ……」

その後、俺は上司にこつてり絞られることになつた。
もうすぐで退役だつたんだけどなあ。

基地に帰り、俺が上半身裸で羽を出すと、皆がおおーっと手を伸ばす。

「あー。もふもふは一般的には変態行為で恋人同士でもしないのでご遠慮下さい。あと、単純に風切羽に触られると怖え。飛べなくなるし」

「そこは鳥と一緒なんだな」

びたつと手を止め、残念そうに頷く。

「空飛んでみて下さい！」

リクエスト通りに翼をばさりと鳴らし、空を滑空する。

「すげー！」

「まだまだだけどな」

「厳選したビー玉を捧げると、天狗になれるのか」

「引受先の天狗の嫁さんが必要だけどな。あと、種族が変えられるんで、異種族婚は認められない。子供が可愛そうになるつてことでかなり軽蔑されるし、ハーフは普通間引きされるらしい。飛べない子の血を拡散できないつてことで」

「キスすると天狗になるつてのは」

「天狗の使える妖術で、祈祷師じゃなくても短い間なら種族を変えられる。俺なら一日1人、3時間が限度かな」

「なるほど。日本の片隅に天狗村があると」

「というより、魔界の天狗村と人魚の村への通り道があるようだな。大抵は人間嫌いなんだが、変わり者なんかが、潜り込んでバイトして買い物していくみたいで」

「これは大変なことだぞ……」 日本国民を日本国民と認めていないと見るか、外国人

が日本にフラフラ迷い込んでると見るか、どつちでも問題だ！」

「やつぱり？」

俺と巻き込まれた山口は大目玉を食らい、ミオたちと連絡を取らされたのだった。

極上のビー玉

「こんな所にこんな場所が……」

「妙な形の珊瑚と木ですね。めっちゃ侵食されてるじゃないですか」

「ああ、海が綺麗になつてゐる！」

おお、お客様が來たぞ。ちなみに水が綺麗になつてゐるのは人魚の魔法である。空気がきれいになる翼人の魔法も使つてゐる。エルフがいれば更に完璧なんだが。「よく來たな」

「オオタカ！ 悪いな。バレちまつた」

佐藤が謝り、ティアが寄り添うのを抱きとめる。

「いつまでも隠し通せるとは思つていない。要求を聞こうか」

オオタカの質問に、早速佐藤は紹介した。

「こちら、外交官の田上 純さんと、俺の上司の大野 晴貴大佐と海上自衛官の海野 美雨大佐。こちら、祈祷師で変わり者でハグレの天狗のオオタカさん。こつちは同じく人魚のミオさん」

『宜しくおねがいします、オオタカさん。ミオさん』

「どうも、航空自衛官の大野です」

「海野です」

「これはご丁寧に」

「今回は調査に来ました。お互に良い関係を築きたいと思っています」

「そう願うよ」

「航空自衛隊としては、翼人になる薬を売つていただきたい。行く行くは、翼人化の祈祷を行つて欲しい。もちろん、ハーフの子供は作らないようになります」

「薬ねえ。それはまあ、作れるけど。祈祷も出来るけれど。

ただ、媒体集めなど、色々しなければならない事がある。その価値があるのか。覚悟はあるのか。

「種族を永遠に変える魔法は一度しか使えない。覚悟はあるのか？」

「もちろん、志願者のみとする」

「海上自衛隊は、人魚になる薬を売つていただきたい。同じく、行く行くは人魚の祈祷を望んでいる。子供を作る際は配偶者も人魚になつてもらい、もちろん志願者のみとする」

「俺はオオタカみたいに報酬をビー玉で済ませたりしないぞ」

「俺もしないから！ ビー玉はもらうけど！」

もううのかよ。

「何を望む？」

「人魚保護と湾の開放を。後は謝礼金」

「俺も森を開放してほしいなあ。天狗保護と自然公園の開放がいいや。後は謝礼金と極上のビー玉！」

「それは私の領分ですね。ひとまず持ち帰らせていただきます。魔界は人間が言つても大丈夫なのものですか？ 是非一度お伺いしたい。それと、天狗の長と人魚の長にお会いしたいのですが」

「それは無理。同族の群れの長に謁見するならともかく、人間に会うことはない。魔界に連れて行つてもいいけど、チラ見せだけで案内はできない。他の集落に不用意に近づくのは危険だから」

「なるほど。国はないと？」

「それすらわからないんだってば」

「とりあえず、連れていくるところまで連れて行つて下さい」

「ということで、掘つ立て小屋に連れて行つた。

広い海と青い空。崖に隠れるような小さな掘つ立て小屋。

ウムウムと頷いて、人間達は帰つていった。

それから、取り急ぎということでトランクいっぱいの輝かんばかりのビー玉が届いた。
オオタカの目がハートマークになつていた。こ、怖あ。種族特性は俺も気をつけよう
……。

掲示板回1

【魚？鳥？】人魚と天狗が記者会見を始めた件について【国民？】

日本国政府は人魚の集落と天狗の集落の接触に成功した。

魔界を日本国土と認めるか、魔界の住人をどう判断するかは意見が割れており、まずは自衛隊により人魚と天狗の群れを作つて向こうの長と接触することを目標とするところである。

その為、航空自衛隊の志願者と海上自衛隊の志願者に、それぞれ天狗と人魚に転生させることを決定した。

この転生の供物として、特に光り輝く性質を持つビー玉を選別し、天狗達に送った。また、○○海岸と○○自然公園が人魚と天狗に開放され、保護条例が発布される。

転生の儀は本日、15時から行われる。

124：妖怪ナナツシー

病院が来い

129：妖怪ナナツシー

政府が狂つた。

141：妖怪ナナツシー

はいはい、エイプリルフールエイプリルフール

154：妖怪ナナツシー

政府はこんな冗談言つてる場合じやないだろ。

170：妖怪ナナツシー

時間だ。

185：妖怪ナナツシー

おお、コスプレした祈祷師っぽい格好の人が空を飛んで降りてきた。
自衛隊員が並んでいる前に捧げものっぽいものがあるな。

自衛隊の家族っぽい人達も並んでるな。

ビー玉がやら輝いているぞ。

水槽が運ばれてきて、水槽の中に入魚の祈祷師が。

二股に別れた尻尾の人魚で、まあ、作った映像だよな。

196：妖怪ナナツシー

祈祷始まつた。

201：妖怪ナナツシー

ドンドン鳥人間と人魚になつていくな。結構面白い。

政府たまには面白い冗談するじやん。

どうせCGだろうけど。

216：妖怪ナナツシー

その割にはマスコミが偉い騒いでないか？ これはCGではありませんて

228：妖怪ナナツシー

はつはつは。そんなバカな

245：妖怪ナナツシー

おい、○○海岸線に来てみろ、人魚が本当にいるから。

【画像】

250：妖怪ナナツシー

はつはつは。そんな馬鹿な……いたー!!

261：妖怪ナナツシー

天狗とちゆうすると天狗になるらしい。

人魚とちゆうすると人魚になる。ただし無理矢理はNG。

266：妖怪ナナツシー

人魚外国语やん。外人やん。そこは認めちゃ駄目だろ、日本。

281：妖怪ナナツシー

ファンタジー「来ちゃつた♡」

285：妖怪ナナツシー
来んな。

286：妖怪ナナツシー
おいでませ！

313：妖怪ナナツシー

祈祷儀式終わった。鳥の祈祷師さんビ一玉だけ持つて帰った。

328：妖怪ナナツシー

若干鳥人間たちが羨ましそうなのが……。
光り物好きなんだろうな。

346：妖怪ナナツシー
鳥だしな。

362：妖怪ナナツシー

本当ならビー玉で騙すの怒られない？ つて思つたけど大丈夫なんだろうか。
中世かよ。

368：陸上自衛隊員

ビー玉の価値は知つてるから大丈夫。 ただ本能に逆らえないだけ。
他にも報酬はきちんと貰つているよ。

375：妖怪ナナツシー

ねえねえどんな気持ち？ 陸上だけハブにされてどんな気持ち？

393：陸上自衛隊員

ふふふふふふ……。 実は！ あつ 機密だつた

405：妖怪ナナツシー

ええつ！？

415：妖怪ナナツシー

そんなひどい

416：妖怪ナナツシー

言つちやえ言つちやえ……とも言えないか。本当に言うなよ？ 振りじやないぞ？

423：妖怪ナナツシー

一ヶ月後のニュースをお楽しみに

439：妖怪ナナツシー

一ヶ月後かあ

446：妖怪ナナツシー

【速報】日米調査隊が魔界へ

外国の介入、一ヶ月どころか一日持たなかつたな。

魔界調査隊！ 1

日本国首相、雨竜 康隆は期待に胸を膨らませていた。

「首相、いくらなんでも訓練無しで即座に魔界に調査に向かわせるのは厳しいのでは？」
「スピードが命なのだ！ 法律に則り、しかし日本が何より早く魔界に乗り込むことが
重要なのだ！ いいか、日本の調査隊は絶対に本日中に出発させる！」

「それは素晴らしい！ アメリカの調査隊も準備は万全です。早速向かいましょう！」

ぐつといつのまにかそこにいた大使がふあいと！ とポーズを取る。大柄の男が可
愛いポーズをしても可愛くないのである。

「ああああああ…… orz 一緒に頑張りましょう……」

スパイ天国日本がアメリカに情報戦で勝とうと思うほうがおかしいのである。

米軍兵士達はサワサワしていた。

それはそうである。

「猫又チームはこつちでーす」

「耳長集まれー」

「ドワーフはこつちー」

「人狼はこつち！ ワオーン！」

「天狗集まれー」

「人魚集まれー」

そう、異種族がいっぱいいるのだ。元日本人だけど。

郷に入つては郷に従えという日本のことわざがあるが、種族すら変えるとは。解剖したい。

「傾注！ ミオ殿からお言葉である！」

「あー。はるか昔、酷い亜人差別があつて、亜人狩りが行われたらしい。その関係で人間の街とは距離をとつていて、言葉を含めて今はどうなつてているかさっぱりわからない。心して探索して欲しい。それぞれの種族の出来ることを書いて配ったから、覚えておいて欲しい」

なんだ、何もわからないのか。

「最後に、皆に翻訳魔法を掛ける。一ヶ月は持つはずだ」

「ありがとうございます！」

「「「「「ありがとうございます！」」」」

訂正。これだけでも大助かりである。

しかも、栄えている街の近くにそのまま道を開いてくれるという。優しい。

街近くの森に出て、まずゲートを守る部隊と移動する部隊に分ける。

そして、移動を開始した。

ダグはあくびを引っ込めて、同じくあくびをしているトムをつついた。

「おい、あれ」

「なんだあれ。皆を呼べ！」

トムのへによんとした耳がピンと張る。

馬がなくとも進む馬車、その背に乗るのは明らかに訓練された男達である。すわ侵略か。

一触即発の空氣となる。

「初めまして。私は、日本国の外交官の田上と言います。この度、こちらの国を見つけ、ご挨拶をと思いまして。そもそも、首都はどこですかね？」

「ええ……？ 待て、連絡をする。とにかく待て」

「わかりました。ちなみに貴方は、人狼さんですか？」

「俺!? 目が高い！ そうだ！ 狼の獣人、その名も狂犬のトムよ！」

「犬じやねーか！ お前なんていいとこチワワだチワワ」

「貴方は天狗？」

「天狗？ なんだそれ？ 俺は鷹のダグよ！」

「とべない雀じやねーか」「うるせー、鼻の効かない犬が」

いつもの漫才をやつて、ハツとする。

「あんたら、人間至上主義か!？」

「そんな、まさか！ 人間族は極めて多いですが、獣人への寛容さに追いては群を抜くと信じております」

「寛容っていうかケモナーだろ？ あー、この一団の半数が獣人だから大丈夫。おい」

「全く、アレックスさんは……。倉見さん、変身して下さい」

「ハツ」

倉見と呼ばれた男が人狼的な姿に変身して、ダグは腰を抜かした。

「じゅ、純血主義者だ……純血主義者がハーフを狩りに来たぞー！ ひい、ひー！」

「失礼なことを言わないで下さい！」

「はひつ」

「そういえば、オオタカさんがハーフは間引きされると言つてましたか……ハーフでも間引きされない街はあるのですね。それはそうですよね。ハーフが産まれないはずはないですから」

ふむふむと田上と名乗つた男が頷く。

「心配せずとも、ご挨拶に来た街で、まさか攻撃されてもいらないのに無体な真似はしませんよ。私達はあくまで、この国の事を知り、国交を開きたいだけです」

「フロンティアー！」

「アレックスさん、やめてください。振りじやなくやめてください」

田上がダグとトムを落ち着かせるのに一時間かかった。